様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３３７５

研究課題名（和文）島民と学生が取り組む「楽しく老いる島づくり」実践モデル構築と島民のＱＯＬの変化

研究課題名（英文）Constructing a model of enjoyable living for aging island populations by residents and students and its effects

研究代表者
大西　美智恵（onishi, michie）

香川大学・医学部・教授

研究者番号：３０２２３８９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：島民と学生が協働で、３つのプログラム（写真パネルの展示、島まるごとミュージアムマップづくり、いきいきサロンづくり）を実践することを通して過疎化・高齢化の進んだ小離島での「楽しく老いる島づくり」の実践モデル構築と島民のQOLに与えた影響を明らかにした。
その結果、実践は、島民と学生が経験や想いを分かち合う機会となった。島民は新しい経験をし、生活に新しい興味を加える。そのことがQOLの向上に寄与すると考えられた。

研究成果の概要（英文）：We examined the construction of a model to create an enjoyable living environment for aging populations of small, remote islands undergoing depopulation, and its effect on the quality of life of the residents. The project involved implementing three parts a photography panel exhibition, creation of a comprehensive map of the island and establishment of a lively meeting place.
We found that the project provided opportunities for island residents and students to share their experiences and expectations, and provided residents with new experiences and interests; which contribute to improving quality of life.

研究分野：医歯薬学

キーワード：離島　島民と学生　協働　島づくり　実践モデル　ＱＯＬ

１．研究開始当初の背景

高齢化・過疎化の進んだ小離島では、コミュニティの存続を支えてきた世代間の順送りが出来なくなりつつある。島民相互の扶助ができない状況は高齢者のモラールを下げるという報告[1)]もあることから、島民の生活に即した従来からの相互扶助と、それを補完する新しい相互扶助の構築が必要である。ただ、島民の年齢層で相互扶助の考え方と QOL に違いがあるが、年齢の違いを越えて島民は、若者との接触を歓迎していた。

２．研究の目的

若者との協働をキーコンセプトとして、島民と学生が協働で、３つのプログラムを実践することを通して過疎化・高齢化の進んだ小離島での「楽しく老いる島づくり」の実践モデル構築と島民の QOL に与えた影響を明らかにする。

３．研究の方法

（１）研究デザイン

３つのプログラムの実践を通して「楽しく老いる島づくり」実践モデルを構築し、島民の QOL の変化を検証する地域介入研究である。

（２）研究期間

平成 23 年 8 月～平成 26 年 10 月

（３）研究方法

以上３つのプログラムの実践が、島民の QOL に変化をもたらしたのか否かを、全島民を対象に QOL 調査を行うとともに、聞き取り調査を行う。

①パネル de 今昔物語（写真パネル展示）

島民が持っている古い写真を借り受けるとともに、学生が当時の貴重なエピソードを聞き取りまとめて、写真と合体しパネルを作成する。写っている実際の集落内や周遊道に写真パネルを展示することで、普段なにげない島の路地を、郷土史料の道に変え、島民も古き良き時代を感じ、出歩きたくなる島づくりを目指す。また、観光客も楽しく散策できるよう、パネルの場所を示したマップを作成することで島の活性化を図る。

②男木島まるごとミュージアムマップづくり

男木島特有の石垣や集落、斜面畑などの地域の景観そのものを展示物として、体感型ミュージアムとする。瀬戸内国際芸術祭に参加したアーティストとともに、学生が見るだけでも楽しいミュージアムマップを作成する。島内にとどまらず島外の人にも広報し、島民と島外の人との交流の機会とする。

③島民と学生が協働で運営するいきいきサロンづくり

島の今と昔を比べ懐かしみながらのパネルづくりやマップづくり、その懐かしい話の聞き取りを通して、島民と学生が触れ合うことをサロンづくりの契機とする。世代を超えてともに集うことで、新しい相互扶助の構築を試行し、今後の地域再生のあり方を占う。

なお、サロンの場所選定に際し、実態調査を行う。

４．研究成果

（１）主観的幸福感に関連する要因（介入前調査）

介入前（平成 23 年 8 月）に、A島に住民票を置く全島民 192 名（2011 年 4 月 1 日現在）を対象として聞き取り調査を行った結果、男性 22 名、女性 29 名,合計 51 名（26.6%）から協力を得られた。平均年齢は 73.2 歳（SD9.1）であった。主観的幸福感（改訂版 PDC モラールスケール）の平均値は 10.25 点/17 点（SD2.64）で、男性の平均値は 10.95 点（SD2.23）、女性は 9.72 点（SD2.64）で差は認めなかった。主観的幸福感は主観的健康観（$r=.311, P<.05$）および経済状況（$r=.457, P<.001$）とは正の相関を示し、島外のネガティブサポート（$r=-.308, P<.05$）とは負の相関を示した。重回帰分析で主観的幸福感と有意な相関が見られたのは経済状況（β

=.457,P<.001）のみであった。

主観的幸福感の平均値や、男性に比べ女性の平均値が低いという結果は、都市部や農村部で行った先行研究と同様であった。厳しい自然環境や高齢化・過疎化の進んだ離島であっても、それらの環境を熟知し、人生と島が分かちがたく結びついているが故の結果であると言えよう。経済的にゆとりがなくても生活ができる環境ではあるが、一旦健康に支障が生じると医療に関する支出が負担となり、主観的幸福感を下げるのではないかと考える。また、ソーシャルサポートが主観的幸福感に関連する要因にならなかったのは、島内外にかかわらず多くのサポートを受けているためと考える。これらの結果より、少子高齢化の進んだ小離島の島民の QOL（主観的幸福感）を維持・向上させる対策に資することができたと考える。

（２）パネル de　今昔物語（写真パネルの展示）

コミュニティセンター職員と大学が検討を重ね、写真の借り受けと選考を行った。なお、選考に先立ち写真に写っている現地見学を行い参考にした。次に、エピソードの聞き取り対象者 10 名を選択し、学生がエピソードを聞き取りまとめた。その内容をコミュニティセンター職員が確認した後、20 枚の写真パネルとマップを作成した。平成 23 年 8 月に、集落内や遊歩道に写真パネルを展示した。また、島の文化祭にも古い写真を展示し、語りの場を設けた。

加えて、なお、平成 24 年・25 年・26 年に、新たな写真を募り、写真パネルの追加と交換をした。また、マップの追加印刷も行った。

エピソードを聞くことを通して、島民と学生が経験や想いを分かち合う機会となった。島民は学生との語り合いから、人生を振り返り、自己の人生を再評価することで、自尊心を高める。また、学生と関わることで新しい経験をし、生活に新しい興味を加える。そのことが若さを保ち、社会との関わりを持つことにつながり QOL の向上に寄与すると考えられる。しかし、平成 23 年度の調査によると、主観的幸福感と有意な相関があったのは経済状況のみという結果から、写真パネルの展示で QOL の向上を図ることには限界があると考える。

一方、写真パネルの展示やマップは、観光客に好評で、市の広報誌にも掲載されるという副次的な成果を生んだ。

写真パネルと展示した場所を示したマップ

（３）男木島まるごとミュージアムマップづくり

男木島は、平成 22・25 年に開催された瀬戸内国際芸術祭の開催地のひとつでもあったため、本プログラムは、芸術祭の実行委員会およびアーティストたちによって企画・実施された。

なお、島外の人にも広報し、島民と島外の人との交流の機会とするという部分においては、島や島での活動に関心を持ってもらう

ことを目的に、これらの活動を、全学共通科目「キャンパスから地域へ」の講義で報告した。また、本学での女性研究者研究交流会においても発表し、過疎化・高齢化の進んだ小離島での活動を紹介した。

（４）島民と学生が協働で運営するいきいきサロンづくり

男木島は、平成 22・25 年に開催された瀬戸内芸術祭の開催地のひとつでもあったため、サロンづくりが遅れ、研究期間に成果を得ることができなかった。しかし、平成 27 年度に会場の改修が整い実施できる見込みである。

なお、会場の選定に際し、学生が災害という視点から実態調査を行い意見具申した。45 名の島民（全島民の 23.0%）に聞き取り調査を行い、家屋の耐震性の脆弱さや空き家の多さ、避難路確保の困難性、島民の高齢化による避難行動要支援者の多さなどから、島の高台に緊急避難所となり得るサロンを設けることを提言し、結果的に高台でのサロン開設となった。

（４）今後の展望

平成 22・25 年に瀬戸内国際芸術祭の開催地となったことで、多くの観光客が訪れ、島民も日頃の生活パターンにはない芸術際行事に参加する事が多かった。そのため研究の進捗に遅れが生じたり、やむなく計画を変更し研究期間を１年延期したが、十分な成果を得ることができなかった部分もある。しかし、訪れた観光客が新しい島民となり、休校中であった小中学校が再開した。これまでになく島内は活気にあふれており、将来を見据えて様々な事柄に取り組んでいこうとする機運が見られる。

このような中、平成 27 年度からは、学生たちによる半年間の継続的な家庭訪問も始まっている。また、コミュニティ協議会からは、学生たちによるサロンでの健康教育の企画もあり、島民と学生が取り組む「楽しく老いる島づくり」は継続の予定である。

＜引用文献＞

１）出村慎一・南雅樹・野田政弘他：地方都市在住の在宅高齢者のモラールの特徴，日衛誌，56，655-663，2002.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　３件）

①大西美智恵、辻京子：小離島における島民の主観的幸福感に関する要因、日本ルーラルナーシング学会、2012 年 9 月 15 日、長野県立大学（長野県駒ヶ根市）

②大西美智恵、「楽しく老いる島づくり」の実践モデル構築をめざして、日本ルーラルナーシング学会、2013 年 10 月 13 日、和倉温泉会館（石川県七尾市）

③中尾陽子、真境名夏乃、藤原明日香、佐々木りか、大場美佳、大西美智恵、超高齢化が進む小離島における防災の実態、四国公衆衛生学会、2015 年 2 月 6 日、サンポートホール高松（香川県高松市）

〔その他〕

大西美智恵、島民と学生が取り組む楽しく老いる島づくり、香川環境保健福祉学会平成 23 年度研究会シンポジウム、2011 年 12 月 17 日、香川大学幸町キャンパス（香川県高松市）

６．研究組織

(1)研究代表者

大西　美智恵（Onishi　Michie）

香川大学・医学部・教授

研究者番号：30223895